青森／国際芸術センター青森　レポートより　日沼禎子

5 回目となる本年は、メディア・インスタレーションのアーティストユニット、KOSUGI+ANDO により、「森の夢―記憶の森へ」と題した展覧会を開催した。KOSUGI+ANDO はその洗練された表現と深い物語性によって注目され続けてきた。メディアアートは都市の中で生まれ、表現されるものとしての印象が強いのは、誰しも感じることであろうと思う。実際、KOSUGI+ANDO は、大学の付属ギャラリー、図書館、あるいは都市部で廃校となった小学校など、都市生活の場や知的創造の場における仕事も多い。それとは対象的に、ACAC は森の中に囲まれ、圧倒的に自然の力が強い環境である。そうした場の変化が、KOSUGI+ANDO が問題としてきたテーマに大きく刺激を与えることとなった。本展では、記憶、夢、生命の循環をテーマにした過去の代表作をもとに、周囲の森の環境、ACAC の特異なギャラリー空間の中で新たな作品として 4 つのインスタレーションを発表した。その中でも《芳一》と《Pendulum―振り子》は、青森に残る物語、歴史に基づいた作品として生成された。《芳一》は、小泉八雲の怪談「耳なし芳一」からテーマを得た作品で、KOSUGI+ANDO がメディア作品として始めて発表した《芳一―物語と研究》を原案としている。本展では、青森のねぶた祭りの起源とされる物語に登場する人物で、ACAC のある雲谷（もや）付近に、かつて小国をつくったといわれる女酋長・阿屋須（おやす）の伝説を加えて制作。雲谷に住む住民によって自主制作された記念誌「おやすの里」に出会い、この作品のヒントを得た。歴史には登場せず、この地域にのみ語り継がれてきた伝説を重ねながら、語るものと語られるものの関係、歴史を繋げていく役割としてのメディアの物語性を言及する作品である。

《Pendulum―振り子》は、1995 年に、旧龍池小学校（京都）の地下室で発表した作品を原案としている。廃校になったこの小学校の明治末期から現代までの卒業写真が、観客が中央の椅子に座ることによって壁面にプロジェクションされ、別のモニターに映し出される振り子の映像と呼応しながら現代から過去へと時代を遡っていく。誰もが思い出として心に残る卒業写真のイメージは、他者の個人史でありながら、観客それぞれの記憶と結びつきながら、目の前に立ち現れては消えていく。この作品は、同年、東京の旧赤坂小学校、翌年オランダのアイントホーヘンにあるテキスタイル工場の跡地でも発表されたが、この度の ACAC での展示のために、廃校になった旧青森市立宮田小学校の卒業写真を集めた作品として再編成。この地域にとって、よりリアリティのある作品として展開された。1927（昭和 2）年から 2003（平成 15）年までのかつての小学校 6 年生たちの眼差しが私たちに向けられる。同じだけの時間を過ごしてきた子どもたちの夢や思いが集まり、森の中に静かに降り積もるように眠る。その夢や記憶が、森の精霊となって現代に生きる私たちを静かに見守る。一瞬にして移り変わるスライド写真が留める永遠の時。かつての自分に向き合い、記憶というものの不思議さに向き合う場を生命の宇宙ともいえる森の中で、私たちは体験したのである。